漱石と村上春樹の作品における女主人公の生き方

— 『三四郎』の美禰子と『ノルウェイの森』の直子から見て—

国立台湾大学大学院生

黄 馨 誼

1. はじめに

漱石と村上春樹を比較する論説は主として物語の構造、主人公の造形、漱石に対する意識などから成る。また、比較される作品も『ノルウェイの森』と『こゝろ』に集中している。¹石原千秋は漱石の『こゝろ』が村上春樹の『ノルウェイの森』の本歌取りであり、つまり二つとも「誤配」の装置がつけられると論じている。²確かに、二つの物語の類似点が多く取り上げられるが、恋愛の結果から見れば、『三四郎』と『ノルウェイの森』がさらに似ていると思える。二つとも恋愛の実らない小説であり、主人公たちが上京して大学で勉強する時期が物語の背景とされている。それらによって、本稿は『三四郎』と『ノルウェイの森』を比較対象として考察していきたい。

半田淳子は『三四郎』も『ノルウェイの森』も、主人公が大学に入学するために地方から上京し、そこで様々な人間と出会い、女性を愛し、そして最後には失うという共通したストーリー展開を示している。³と指摘している。すなわち、主人公たちが一度もらったものは最後に何も残っていなかった。半田氏は二つの作品における背景、主人公たちの造形を明らかにして、女たちの造形についても少し触れたが、女たちの消える（つまり、最後に主人公たちのそばにいない）原因はまだ言及していない。おそらくこれは彼女たちの生き方と関わりがあるだろう。本稿は二つの作品における主人公たちに大きな影響を与える女たち、美禰子と直子に焦点を絞って考察しながら、半田氏の説に基づき、『ノルウェイの森』の直子の人物像を明らかにし、また『三四郎』の美禰子を中山和子の論説に従って確認する。それらの解明を通して二人の女主人公のそれぞれの時代における生き方を探ってみる。

2. 『三四郎』—美禰子の生き方

『三四郎』は明治 41 年（1908 年）に朝日新聞に連載された作品である。周知のように、美禰子は「^{アン}無意識の偽善者」として物語で造形された。また、彼女は実に野々宮を愛して、彼を挑発するという論説が多く出てくる。このように、野々宮、三四郎、そして美禰子という三角関係が成っている。本節ではこうした三角関係における美禰子の女性像を探り、そして美禰子の結婚から彼女の生き方を探ってみる。

¹ 平野芳信（1997）「最初の夫の死ぬ物語—『ノルウェイの森』から『こゝろ』に架ける橋」『漱石研究』（9）翰林書房／山根由美恵（2007）「『螢』に見る三角関係の構図—村上春樹の対漱石意識—」『国文学攷』（195）広島大学国語国文学会／石原千秋（2013）「村上春樹と夏目漱石 国民作家のまなざし」『文芸春秋』文芸春秋

² 石原千秋（2013）「村上春樹と夏目漱石 国民作家のまなざし」『文芸春秋』文芸春秋 P. 247

³ 半田淳子（2007）『村上春樹、夏目漱石と出会う』若草書房 P. 63

2.1 三角関係から見る美禰子の女性像

今まで美禰子に関する先行研究は彼女が男を誘惑して、謎の女として『三四郎』に位置されている。それ以外には、「森の女」、「水の女」などの説もある。中山和子は「「自意識」の女美禰子というものを想定する、深刻な読みが従来からある。」⁴と述べている。つまり、美禰子は高等教育を受けて自意識を持つ女性であるのは従来の論説でありながら、三四郎、野々宮そして美禰子から成り立つ三角関係に関する論説がある。詳しく読めば、確かに美禰子と野々宮との間には不自然な空気が漂っている。例えば、最も印象的なのは丹青会の展覧会の時、美禰子は「呼ばれた原口よりは、原口より遠くの野々宮を見」（P. 211）て、そして、野々宮は「妙な連と来ましたね」（P. 211）と言って、美禰子が「似合ふでせう」（P. 211）と答えた場面がある。これは三角関係が浮上すると同時に、破りの始まりとも言えるだろう。

作品の中の唯一視点である三四郎から見れば、東京に住んでおり、高等教育を受け、芸術にも興味を示している美禰子は都会の雰囲気に入る女性である。さらに、英語を熱心に勉強する点から、美禰子は西洋の文化に深く影響されると推測できる。19 世紀末、20 世紀には自力で生活出来る女性は「新しい女」と呼ばれる。この「新しい女」の風潮は西洋から始まり、日本は 40 年ほど遅れたが、美禰子は正にはやく周りの環境から西洋文化に接した「新しい女」と推測できよう。

そして、田舎から上京し、東京での新しい生活に大いに期待している三四郎⁵は美禰子のような女性に魅せられるのは自然だろう。が、明治社会において女性は「良妻賢母」という期待が与えられた当時の社会の状況であったことも見落としてはならない。佐藤能丸は次のように論じている。

「良妻賢母」という概念は西洋近代の女性を範としたもので、女子教育の目標が「良妻賢母」の養成にあることを最も明確に打ち出したのは初代文部大臣森有礼である。（中略）「良妻賢母」は、「賢母」の強調に近代性があり、鳩山春子に代表されるような西洋的良妻賢母主義も存在したが、近藤芳樹編『明治孝節録』（一八七七年、宮内省）に示される儒教的な「節婦」像と重なり、「婦徳」「女徳」の涵養が強調される場合が多かった。（中略）良妻賢母主義教育は、九八年制定の民法の「家」制度と一対をなし、女性の男性への隷属システムとして機能していった。⁶

上記から明治時代には教育を通して女性が儒教的色彩を持つ良妻賢母のように造形されることが伺える。つまり、良妻賢母は明治時代に理想的な女性像と言っても過言ではない。しかし、美禰子は良妻賢母に育てられたのではなく、彼女は自分の未来や人生を自分で決め、いわば自意識を持ち、そして自由恋愛の道を選んだのである。

また、美禰子が愛に対する積極性も前に引用した丹青会の場面から見える。野々宮に向かう視線だけではなく、三四郎に対する態度も伺える。なぜ三四郎を愛していないのに、曖昧な雰囲気を作ったのか。

⁴ 中山和子（2003）『『三四郎』—片付けられた結末』『漱石・女性・ジェンダー』翰林書房 P.50

⁵ 「是から東京に行く。大学に這入る。有名な學者に接触する。趣味品性の具った學生と交際する。圖書館で研究をする。著作をやる。世間で喝采する。母が嬉しがると云う様な未来をだらしなく考へて、（後略）」（P.15）

⁶ 阿部恒久・佐藤能丸（2002）『通史と史料 日本近現代女性史』芙蓉書房出版 P.36

それは田舎から来た単純な三四郎は美禰子に一目惚れ、また彼自身の自惚れによって美禰子が自分に好意をしていると思いついたのだのである。つまり、最初には美禰子は三四郎を「翻弄」するのではなく、三四郎自身が美禰子に夢中になったのであろう。その点に気づいた美禰子は野々宮の関心を集めるように三四郎を利用したのであろう。また、なぜ三四郎が美禰子の恋人同士になれなかったのか。以下のように考えられる。

与次郎は「よく金持の娘や何かになんかがあるぢやないか、望んで嫁に来て置きながら、亭主を軽蔑してゐるのが。美禰子さんは夫よりずっと偉い。其代り、夫として尊敬の出来ない人の所へは始から行く気はないんだから、相手になるものは其気で居なくつちや不可ない。さう云ふ點で君だの僕だのは、あの女の夫になる資格はないんだよ。(P. 297)」(下線は筆者により。以下同様)と美禰子进行分析した。確かに美禰子の周りに、相手の年齢や彼女が尊敬するという条件に相応しい方は野々宮しかいない。美禰子は恋愛の相手を野々宮にするのは容易に納得できるだろう。⁷しかし、野々宮は研究にしか熱中していないゆえに、二人は恋人同士になれない。

一方、美禰子に対する敬慕が隠れない三四郎は、たとえ広田先生や与次郎が美禰子のことを「心が乱暴だ (P. 147)」と言っても、自分で彼女の気持ちやどうしても確認したい。美禰子と初めて二人きりになっている場面、また彼女が言っている全てのことを三四郎は思い出して、それから彼女と野々宮との曖昧な雰囲気も一緒に合わせ考えた。丹青会の場面において、美禰子がわざと野々宮に「似合ふでせう」(P. 211)と言ったのはおそらく野々宮に嫉妬させようと図っていたのだろう。しかし、野々宮はそれに対して何の反応もなかった。三四郎は後に「野々宮さんを愚弄したのですか」(P. 215)と美禰子に聞いたが、美禰子は無邪気に否定な答えを言った。この「無邪気」は意識して無邪気をした可能性も考えられるだろう。なぜかという、美禰子は自分の企みを三四郎に気づかれて、自分の悪いところを隠すように無邪気をするわけである。

以上の分析から見れば、美禰子の女性像はまず言うまでもなく、明治時代の新しい女である。そして、彼女はおそらく自意識が強い、いわゆる広田先生が言ったような利己主義の「露悪家」であろう。美禰子はウブな三四郎を魅惑させ、露見したときまた「無邪気」な顔で自分の企みを隠そうとした。

さらに、中山和子が美禰子の女性像を作品に出る画の視点から以下のように論じている。

美禰子にそうした天然自然の誘惑本能をあたえようとする作者の意図は、たとえば引越しの日、美禰子が画帖をさしだして三四郎にみせる絵が、広い海を背景に髪をくしけずる「人魚」であることにも象徴的であるように思える。全身を濡らして水中から浮かびあがり、男たちにむかって水底の樂園の至福をささやきかけるように、誘いこむようにして姿を消す、美しい水の女のイメージ、

⁷ 中山和子は「美禰子は野々宮さんの国際級の科学者の頭脳、冷静な合理主義、研究に明け暮れる地味な生活を一面では敬慕しながら、奔放に夢みがちな身内の情熱と、どこか嘯みあわなないからだちから、意識して挑戦的になりがちである。」と指摘している。(中山和子 (2003) 『三四郎』—片付けられた結末『漱石・女性・ジェンダー』翰林書房 P.51)

マーメイド、男たちの不滅のアニメー。⁸

下線部分を見ると、美禰子は「無邪気」と「露悪家」の二つの性格を同時に持っていることが窺える。つまり、作者には美禰子を理想な女性として造形しながら、悪い部分を隠そうとする意識をも持っていたという矛盾を抱えていたことは想像できるのであろう。自由や理想を追求することは共に美禰子の女性像の一部であり、彼女が結婚することを選択する要となると思われる。

2.2 美禰子の結婚

ストーリーは美禰子がそれまで現していない男と結婚した場面で終わっている。しかも、その男はそもそもよし子と婚約した方である。この微妙な結末はいったいどのような意味を指しているのだろうか。

中山和子は明治時代の社会背景を要素として、御光さん、名古屋の女（汽車で会った女）と共に考え合わせ、美禰子の結婚を以下のように述べている。

美禰子が「無意識」の技巧を弄するとすれば、それは「天性」の発露であるよりも、常に見られる側に置かれた立場、客体としての「女」という父権的社会的制度によるのである。見る側にある「男」の視線を内面化してディスプレイする時、無意識と意識の境界は曖昧になるだろう。「優美な露悪家」自意識家としての美禰子は、この境界にたたずむ存在である。そして、一見、奔放自由であるかに見える美禰子が、じつは制度としての「女」、「結婚」という制度のなかの「擒」であることを示す物語が『三四郎』である。⁹

氏の論説に従えば、表には美禰子が都会の新しい女のように周りの男性の目に映っているが、実際に制度、いわば伝統のフレームに囲まれている。となれば、美禰子が結婚という道を選ぶのは現実妥協したとも言えるだろう。しかし、もし結婚の道を選ぶというのは制度の擒になることを意味しているなら、なぜ自由を捨てて、結婚するのか。中山氏が言ったように「商売結婚」を理由としては少し足りないと思われる。ゆえに、筆者は美禰子の結婚を彼女の女性像と考え合わせて、おそらく「逃避」の意味が含まれると考えたい。

理由として、2.1 で触れたように、美禰子はそもそも未来に対して考えを抱いており、そして自由恋愛をし、理想を追求する女性であった。しかし、野々宮との実らない恋、つまり恋愛の失敗によって、彼女の所謂理想状態に欠陥が生じたため、今の生活圏から離れる窮地にたたされるのであろう。そして、前述したように、彼女は自分の欠点を隠して、理想の状態だけを表す。彼女の理想状態を回復するために、野々宮の条件と同じかより良い男を結婚相手にするのが一つの手段であらう。更に、周りの人に嘲

⁸ 中山和子（2003）『『三四郎』 — 片付けられた結末』『漱石・女性・ジェンダー』翰林書房 P.52

⁹ 中山和子（2003）『『三四郎』 — 「商売結婚」と新しい女』『漱石・女性・ジェンダー』翰林書房 P.72

笑されないように、結婚するのも今の生活圏から逃げる一つの手段であることを思い立ったと考えられる。

明治時代の婚姻について、阿部恒久は考察を通して、以下のように示される。

第一に、家に、家族に対して絶対的支配権をもつ戸主を置いた（戸主制度）。（中略）第二に、結婚し妻となった女性を戸主＝夫の支配下に置いた。妻は夫の家に入ること、家族はその家の氏を称することとされ、妻は制限付き無能力者であると規定されて夫の同意なく財産を処分できなかった。¹⁰

上述から明治時代の父権色彩が濃くて、結婚というのは女性にとって支配されることに等しいと思える。支配されるにしても、擒にしても、美禰子にとって結婚というのは自分の自由が奪われることになる。とはいえ、理想的な状態に戻って、またかつて傷つけられた人がいる生活圏から逃げる唯一の方法は結婚しかない。

結婚相手にどのような感情を持っているのかは書かれていないが、最後に呟いた「われは我が愆を知る。我が罪は常に我が前にあり（P. 306）」という詩句は逃げるために結婚するのを罪として認め、また自由が奪われて、生活に囲まれるのもその罪を償う手段と考えられないこともない。

2.3 結び

以上から『三四郎』の時代には、「結婚」は確かに伝統のフレームに囲まれることになるが、新しい女の姿で明治時代の都会に生きる美禰子はおそらく野々宮との失敗の恋愛によって、今の生活圏から離れてまた理想的な状態に戻るために、唯一の道は結婚することであろう。

理想なものしか受け入れない、それが挫けたとき、別のところで理想を求めることしか考えられない美禰子にとっては、恋愛にも、野々宮という「ずっと高い所に居」る人と恋人同士になりたがり、また結婚にも、「金縁の眼鏡を掛けて、遠くから見ても色光沢のいい男」と夫婦になったわけである。全てが理想で、彼女自身も理想な女と造形されている。ゆえに、理想が破られたことを受け入れなかった時、逃避という道を選ぶしかないのであろう。それが美禰子という「新しい女」の生き方ではないだろうか。

3. 『ノルウェイの森』-直子の生き方

『ノルウェイの森』は1987年に出版され、短編作品「蛍」からなる長編小説である。物語には「僕」は親友キズキが自殺してから、キズキの恋人である直子と仲良くなる。直子はキズキが死んでから普通に生活できなくなって、阿美寮という療養所へ行った。しかし、最後には同じように自殺した。

今まで直子に関する論説は主として直子が死の代表であって、或いは自己回復についての観点から論

¹⁰ 阿部恒久・佐藤能丸（2002）『通史と史料 日本近現代女性史』芙蓉書房出版 P.26

じ始める。例えば、渡辺みえこ¹¹はレズビアン¹²の視点から直子の死について分析した。遠藤伸治¹²は自己療養の視点から直子の精神状態を解明した。いずれも直子は「向かう世界」の方で、現実世界へ帰還することができなくて自殺したと指摘している。確かに、直子は何度も主人公の「僕」に救済を求めたが、何度も失敗に終わって、最後には自死を選んだ。しかし、以上の論説にはなぜ直子が現実世界へ帰還したがるのが明らかにされていない。この点は直子の自殺と生き方について論じる時に無視できないことである。ゆえに、本節ではまず直子の混乱する原因を明らかにして、その中から直子が現実世界へ帰還する願いを明らかにし、そして直子の死因を究明しながら、直子の生き方を探ってきたい。

3.1 直子の混乱

物語の最初に、「僕」は直子が言った野井戸の話が頭に浮かんできた場面がある。その時、直子は「それは――正しくないことだからよ、あなたにとって私にとっても」(P. 14)、「だって誰かが誰かをずっと永遠に守りつづけるなんて、そんなこと不可能だからよ。ねえ、もしよ、もし私があなたと結婚したとするわよね。あなたは会社につとめるわね。するとあなたが会社に行ってるあいだいったい誰が私を守ってくれるの？(中略)ねえ、そんなの対等じゃないじゃない。」(P. 14)と自分の考えを示した。直子は人間関係と言葉遣いに細かく考えて、「正しい」と「対等」することを追求する傾向がある。この時の直子はすでに「暗くて、冷たくて、混乱していて」(P. 15)いる状態であるから、直子が追求している正しさなどのものがおそらく混乱が起こる原因として考えられる。

直子が混乱に落ちたのは恋人のキズキの死と関係があるだろう。なぜなら、キズキ、直子そして「僕」が三人いる時、「それはまるで僕がゲストであり、キズキが有能なホストであり、直子がアシスタントである TV のトーク番組みたいだった。」(P. 36)という例えによって、ホストがいない番組にはアシスタントの役割がなくなるからである。いわば、アシスタントは自分で番組をやるのは難しいことである。つまり、キズキにずっと頼って生きてきた直子はキズキがいる場しか生きられない。キズキと共に築いた「その世界」は直子の全てであり、直子にとっては完璧な世界である。それはなぜかということ、おそらく小さい頃から二人で一緒に成長して来た直子にはキズキ以外の友人がいなくて、情報源や価値観の構築など彼女のすべてはキズキを通してなされたと言えよう。

一方、「もちろん彼は私と寝たがったわ。だから私たち何度も何度もためしてみたのよ。でも駄目だったの。できなかったわ。どうしてできないのか私には全然わかんなかったし、今でもわかんないわ。だって私はキズキのことを愛していたし、べつに処女性とかそういうのにこだわっていたわけじゃないんだもの。」(P. 164)と直子がキズキとセックスしたことを「僕」に告白した。キズキと一緒にいる「その世界」は直子にとって唯一で完璧な世界でありながら、性的なことがうまくできなかった。直子はおそらくキズキとセックスした時から、濡れなかったという自分の不完全に気づいたのであろう。

このように完全な世界と不完全な自分の間にどこか狂っていると思ったことによって、直子は混乱に

¹¹ 渡辺みえこ (2009)『語り得ぬもの：村上春樹の女性 (レズビアン) 表象』御茶の水書房

¹² 遠藤伸治 (1991)「村上春樹「ノルウェイの森」論」『近代文学試論 (29)』広島大学近代文学研究会

落ちた。直子の完全に対する考えは「僕」に送った手紙から窺える。以下のように書いてあった。

『公正』なんていうのはどう考えても男の人の使う言葉ですね。でも今の私にはこの『公正』という言葉がとてもびったりとしているように感じられるのです。(中略)しかし何はともあれ、私は自分があなたに対して公正ではなかったと思います。そしてそれでいぶんあなたをひきずりまわしたり、傷つけたりしたんだろうと思います。でもそのことで、私だって自分自身をひきずりまわして、自分自身を傷つけてきたのです。(中略)私は不完全な人間です。(P.127)

直子が考えた「公正」とは、いわば自分が「公正」で人と接して、「公正」な人間になって、人を傷つけないのは完全な人間になれば、現実世界と繋げる条件である。2.1 で論じた美禰子の理想や完全性の説に基づけば、直子がここで言及している完全世界も一種の理想状態と言えよう。直子は自分の不完全に気づいたと同時に、また「その世界」もキズキの死によって不完全になった。そうした彼女は自分の歪みを調整して、完全な人間になって、キズキがいない現実世界で新たに生活できるように力を尽くしてみた。

「キズキ君は死んでもういなくなっちゃったけれど、あなたは私と外の世界を結びつける唯一のリンクなのよ、今でも。」(P.189)と言った直子は「僕」とセックスすることを通して現実世界と繋がるように努めた。そして、セックスすることだけではなく、阿美寮に行って治療を受けることまで試みた。阿美寮という療養所は「外界と隔離される」場所であって、まるで別世界のようなところであったが、それは直子にとって心を落ち着かせ、過去を忘れて、全てをゼロからスタートする絶好の場所と思われる。ゆえに、現実世界にいる「僕」と「合う準備ができ」(P.67)るように直子は阿美寮に行った。言い換えれば、阿美寮はおそらく現実世界と「その世界」の中間点だと言えよう。治療を受けて、阿美寮という中間点から普通に生活して、現実世界へ帰還したがる直子の気持ちが窺えるだろう。

以上をまとめてみれば、直子は「公正」、「完全」という理想状態を追求していて、自分の欠点に直面するのが苦手な女性である。杉井和子の「浮遊する存在のイメージを持たせられる直子は、実際には誰よりも重く生きる意味を問うている。」¹³という見解を借りれば、つまり直子は不完全な人だと認めるが、自分を完全するように頑張り続けている。しかし、結果としては、彼女は自分の不完全を受け入れられず、混乱の状態が続いたあと、レイコさんに全てを告白してから自殺した。

3.2 直子の死

前節で論じた直子は理想状態を求める人間だという結論を踏まえて、直子の死について解明していきたい。

直子が追求する正しさ或いは対等などはキズキとの「その世界」から「現実世界」へ戻る条件とも言

¹³ 杉井和子 (2008) 「「ノルウェイの森」の直子—過去の時間・身体の内化」『村上春樹 テーマ・装置・キャラクター』至文堂 P.195

えよう。現実世界でキズキとの正しさと対等が存在しないゆえに、直子は現実世界で生きがたい。言い換えれば、直子にとっては「その世界」には全てが完璧で、一つの汚れもなかった。「その世界」において、二人が分離できないパートナーである。しかし、前述したように、直子の濡れないことで二人のセックスがうまくいかなかった時点から直子は自分の不完全に気づいた。そして、キズキはわけもなく自殺した。直子にとって、これらは恋人の死がもたらした悲しみだけではなく、「その世界」の崩壊がもたらした衝撃でもある。

前節にも触れたように、「その世界」はキズキと直子二人が共に築いたものである。つまり、二人でなければ「その世界」が成り立たない。が、キズキは直子を残して自殺した。

あなたは私たちと外の世界を結ぶリンクのような意味を持っていたのよ。私たちはあなたを仲介にして外の世界にうまく同化しようと私たちなりに努力していたのよ。結局はうまくいかなかったけれど。(中略)でも私たちはあなたを利用したなんて思わないでね。キズキ君は本当にあなたのことが好きだったし、たまたま私たちにとってはあなたとの関りが最初の他者との関りだったのよ。(中略)キズキ君は死んでもういなくなっちゃったけれど、あなたは私と外の世界を結びつける唯一のリンクなのよ、今でも。(P. 188-189)

と直子は告白した。キズキが亡くなった後、直子は「その世界」から脱出して、現実世界に戻ろうとする。しかし、彼女は現実世界が自分の不完全を受け入れないことを深く感じる。積極的に阿美寮に行って治療を受けて、落ち着いたところへ、「僕」という現実世界の方の阿美寮への訪問で、直子は現実世界の不完全を再び想起し混乱に陥り、現実世界と繋げない事実を認識したのである。

また、もし、現実世界のリンクである「僕」と性交することが現実世界へ戻る一つ的手段と見なすことができるなら、「私、あの二十歳の誕生日の夕方、あなたに会った最初からずっと濡れてたの。」(P. 165)という直子の告白から直子は実に現実世界へ帰還できるはずだった。が、一方、「その世界」へ戻るリンクがないゆえに、一度「その世界」から離れると、戻れなくなる。こういう状況で、おそらく直子自身も現実世界へ戻るのを恐れていたのであろう。言い換えれば、キズキが亡くなったゆえに「その世界」が不完全になり、現実世界に戻らざるを得ない状況に直面している直子は、自分なりに試してみた結果、現実世界より「その世界」の方が馴染みやすいことに気づき、現実世界に戻るのを諦めたのではなからうか。

キズキがいない「その世界」はもはや完全とは言えない。一方、現実の世界も直子にとっては不完全な世界である。不完全なものを受け入れられない直子は死を選んだのである。つまり、完璧なもの、理想な状態を求める性格は彼女を死の道へ落込ませたのではなからうか。それが直子の生き方と言うしかないだろう。「死は生の対極としてではなく、その一部として存在している。」と語り手が言うように、直子は死という形で生き続けるかもしれない。

3. 結び

以上の考察を通して、以下のように美禰子と直子の女性像やその生き方を纏めることができる。美禰子と直子は共に理想を追求する女性であり、同じく完璧なものを求め続けている。自分の人生に対しても、一つの汚れも許さない彼女たちは理想状態が破れる時、逃避するという点で一致している。が、その逃避の方法として美禰子は結婚の道を、直子は死の道をそれぞれ選んだのである。

美禰子は青春いわば過去を捨てて、結婚して人妻になる生活に罪を償う手段にした。また、紳士である方と結婚するのも自分に理想的な状態へ戻る方法と考えていた。一方、直子は不完全な自分と世界に直面するように一生懸命に現実世界と同化してみたが、やはり現実世界の不完全より、「その世界」の不完全（キズキの不在）の方がおそらく直子にとって馴染やすいゆえに、現実世界へ帰還するのを諦めたのであろう。

本稿では美禰子と直子に焦点を合わせて考察したが、『三四郎』が『ノルウェイの森』の原型とは言い切れないが、これについて一層深く考察必要があるゆえに、今後の課題にする。

テキスト

夏目漱石（1966）『漱石全集 第四巻 三四郎・それから・門』岩波書店

村上春樹（1991）『村上春樹全作品 1979～1989⑥ノルウェイの森』株式会社講談社

参考文献（年代順）

遠藤伸治（1991）「村上春樹「ノルウェイの森」論」『近代文学試論（29）』広島大学近代文学研究会

平野芳信（1997）「最初の夫の死ぬ物語-『ノルウェイの森』から『こゝろ』に架ける橋」
『漱石研究』（9）翰林書房

酒井英行（2001）「村上春樹・『ノルウェイの森』論（I）」『人文論集』静岡大学人文学部

阿部恒久・佐藤能丸（2002）『通史と史料 日本近現代女性史』芙蓉書房出版

中山和子（2003）『漱石・女性・ジェンダー』翰林書房

半田淳子（2007）『村上春樹、夏目漱石と出会う』若草書房

山根由美恵（2007）「「蛭」に見る三角関係の構図-村上春樹の対漱石意識-」国文学攷（195）
広島大学国語国文学会

杉井和子（2008）『村上春樹 テーマ・装置・キャラクター』至文堂

渡辺みえこ（2009）『語り得ぬもの：村上春樹の女性（レズビアン）表象』御茶の水書房

石原千秋（2013）「村上春樹と夏目漱石 国民作家のまなざし」『文芸春秋』文芸春秋